

「やさしい封筒 A4 サイズ」を形にした 「紙だったら面白い!」を探る 平和紙業のサステナビリティ



平和紙業のショップ「ペーパーボイス」各店では、2022年1月から、購入された紙を持ち帰る包材として「やさしい封筒」が使われています。

「やさしい封筒」は社員が抱いていた「常備在庫販売を終了した紙に、もう一度輝く場をつくりたい」という思いから開発が始まりました。封筒としての使いやすさは保ちつつ、環境への配慮から製造工程上の「ゼロ・ウェイスト」を実現しています。

今回は、環境にも使う人にもやさしい「やさしい封筒」へ寄せられた反響と、お客様の声を受けて新たに生まれた「やさしい封筒 A4サイズ」について、そして、サステナブルな取り組みを続ける平和紙業の「紙」への想いを紐解きます。

プロフィール

紙や印刷の可能性を探り、
デジタルとフィジカルの境界を横断しながら紙や印刷の新しい価値を生み出す
株式会社ペーパーパレード 守田篤史さん

風合い豊かな紙「ファンシーペーパー」をつくり、届け、
持続可能な社会づくりに寄与し、情報社会の中で新たな価値を構築する
平和紙業株式会社 西谷浩太郎

「やさしい封筒」を起点に サステナブルアクションへの共感が広がる

守田：ショップで紙を購入されるお客様から「やさしい封筒」への反響はありましたか？ 私は、デザイナーや印刷会社さんから「やさしい封筒」の取り組みに対してポジティブな意見をもらいました。

西谷：「やさしい封筒」に思い入れを持つ店舗スタッフが、紙を購入されるお客様に封筒の開発ストーリーを伝えていたということもあって、購入量が数枚の場合、ほとんどの方が従来のクラフト紙封筒ではなく「やさしい封筒」を選んでくださっています。店頭でのコミュニケーションを通して、お客様が「『もったいない』から動き出したプロジェクト」に共感してくださったのではと感じます。



ショップで購入された 四つ切サイズ(B3 のび)の持ち帰り用として誕生したやさしい封筒

守田：実際、名古屋のお店では「やさしい封筒」を繰り返し使ってくださる学生さんがいらっしゃったと伺いました。テープで留めるタイプの封筒だと、テープを剥がしたときに封筒が破れたり、跡が残って使い切りになりがちなので、組み立て式のデザインにしてよかったです。

西谷：このエピソードはうれしかったですね。まさにサステナブルというか。また、規格終了品の「OKフロートぶどう」という紙をやさしい封筒に使用したのですが、その紙が「かわいい色！」と評判になったそうなんです。開発のきっかけとなった「紙にもう一度光を当てたい」という想いが叶ったという話も店舗スタッフから聞きました。当時、あまり流通させられなかった紙を用いた封筒が注目されることで、紙の持つ新たな価値に気付かせてもらっています。

使いやすく、環境にも配慮できる封筒で サステナブルアクションを社会に広げたい

西谷：「やさしい封筒」をご覧になった企業から「会社オリジナルの封筒も作れるんですか？」と尋ねられたこともありましたが、ただ、圧倒的に多かったのは「やさしい封筒は大きすぎる」という意見でした。日常的に使われるのは、ほとんどがA4の紙。四つ切サイズ(B3のび)の紙を包むために生まれた「やさしい封筒」は、正直使いどころが難しいという話を受け、「やさしい封筒 A4サイズ」を検討することになりました。

また、コロナ禍が明けたら、展示会やイベントが増えると予想されたことも検討の後押しになりました。資料を入れるクリアファイルやエコバックのように「やさしい封筒」を使ってもらえたらと考えたんです。

守田：西谷さんから「やさしい封筒」のコンセプトや特徴はそのまま受け継いだ「A4サイズ」の商品企画と販売のお話をいただいたのは、2023年の春くらいでした。ただ、製品として販売するとなると、平和紙業の社外で使われることになる。その点が従来のやさしい封筒との大きな違いで、より取り扱いがしやすい設計を考える必要がありました。

西谷：封筒を扱う方がサステナブルな活動に興味を持っていなくても、取り扱いが楽であればきっと使ってもらえる。いかに折りやすく、組み立てやすくするか。守田さんには、「やさしい封筒」という名前のおり、押しつけがましくなく、まず使ってもらえるデザインをお願いしました。



A4サイズのクリアファイルがすっぽり入る「やさしい封筒 A4サイズ」

守田：封筒の素材を選べるようになったのも「A4サイズ」からですね。

西谷：「A4サイズ」は、規格終了品以外に、わかりやすく環境への配慮を表現できる3種類のエコロジーペーパーでの製造が可能になりました。FSC®森林認証紙で、4色中2色は改正グリーン購入法にも適合している(2023年12月時点)「グラフィー CoC」、間伐材を活用した「エコ間伐紙N」、紙の色数が17色あり、古紙パルプ40%以上、バガスパルプ10%以上の配合(2023年12月時点)でFSC®森林認証紙でもある「ディープマット」という紙から選べます。

西谷：それぞれの企業さまや個人さまが環境に対してどんな意識を持ち、どんなアクションを起こしていきたいのかを、素材選びでも表現いただけるようになりました。サステナブルアクションを、平和紙業社内から社外へと広げていく準備が整ったと思います。

守田：ミリ単位で細かな調整をかけることで、コンセプトのひとつ「ゼロ・ウェイスト(ごみや端材を出さない)」も実現できそうでした。紙の質感やカラーもバリエーション豊富になりましたし、社名やメッセージのデボス加工もできる。デザイン面とサステナブルなアクションが両立できた感覚があります。



常備在庫販売を終了した紙を活用した「やさしい封筒 A4 サイズ」

「ゆるさ」と「親しみやすさ」が紙の魅力。 紙がのびのびと活躍できるシーンを探っていきたい

守田：西谷さんとはこれまで、「紙を扱う会社として目指すサステナビリティとはなんだろう」と何度も対話してきましたが、約3年にわたって試行錯誤して、見え始めたことってありますか？

西谷：紙が必要な場面でエコロジーペーパーを選び、環境への負荷を下げるという動きは今後も続くと思います。ただ、メディアとしての紙が増えるとは考えにくい状況で、エコロジーペーパーのさらなる展開を求められるとは思えない。

メディアとしての紙を供給する以外に、自分たちに何ができるだろう。紙を中心に据え、紙と真正面から向き合い、紙の活動領域をどこまで広げられるかを考える中で、デザイナーや印刷会社、紙加工会社、製紙メーカーといった、紙にまつわるプロの視点や発想を交えれば、社会課題を紙が解決する場面をつくれるはずだと信じられるようになりました。平和紙業が培ってきた紙の知識と経験が、全く別の業界が直面する課題の解決に役立つこともあるはずです。

西谷：平和紙業が扱う紙は、ファンシーペーパーの他に様々な機能をもつ技術紙があります。そうした紙と印刷、加工の高い技術を組み合わせた製品やサービスを開発、提供することで、例えば防災や医療の分野で、再生可能な環境に配慮した紙が活躍できる場面があるかもしれない。教育シーンでも、もしかしたらデジタルデバイスからの揺り戻しがあり、手触りのある紙が喜ばれるタイミングが来るかもしれない。社会課題に常にアンテナを張り、平和紙業が中心となって紙の活躍場面を探っていきたいです。

守田：たしかに……今は、プラスチック製のものを紙にして「環境にやさしい！」とする風潮があります。間違っていないですが、何でもかんでも条件反射で紙にすることは、僕も西谷さんも違うと思っています。そうではなくて「紙だったら面白そう!」と思われるような紙の使い方をしたい。西谷さんと「紙の可能性」を話し合う中で印象的だったのが、「紙はゆるい」という言葉でした。

西谷：紙は見た目もやわらかいし、強度も弱いというかしなやかな素材です。あまり大きなビジネスの種にはならないだろうけど、人の身近で気軽に扱える「ゆるさ」が魅力だと思い始めたんです。顔をしかめて向き合うような素材じゃないかと。「紙じゃないとダメなんですよ!」と力説する感じよりは「紙でもよかったね。ちょうどいいね」と言ってもらえる感じの企画ができたと思うんです。

守田：たしかに、金属や木だと曲げたり切ったりするには道具や技術が必要ですけど、紙ならどちらも手でできる。今回の「やさしい封筒 A4サイズ」も、その場で試作をつくり始められたし、話し合いながら調整ができた。こういった気軽さを活かして、しかも誰かの役に立てばなおいいよね、くらいの肩ひじ張らない感じが紙の良さ。西谷さんがよくおっしゃるように「紙が、もっと自由にのびのびと活躍できる場面」を見つけて、面白いことをしたい。

西谷：人に面白いと感じてもらえないと、持続的に使ってもらえる、サステナブルなものってできないと思うんです。3年続けて、やっと紙の活躍シーンが見えてきそうな感触があります。サステナブルというキーワードは、どんな会社でも避けては通れませんし、SDGsへの取り組みは続けていく必要があります。これからも、平和紙業の取り組みに注目していただけたらと思います。



(左)ペーパーバレード 守田篤史 様 (右)平和紙業 西谷浩太郎